令和４年度
出雲市文化財調査報告書

下古志遺跡
（第４・５次発掘調査）

2023 年

出雲市教育委員会

令和４年度
出雲市文化財調査報告書

下古志遺跡
（第４・５次発掘調査）

2023 年

出雲市教育委員会

序

本書は，民間企業から依頼を受けて実施した，集合住宅新築工事に伴う下古志遺跡第４次発掘調査，グループホーム新築工事に伴う下古志遺跡第５次発掘調査の記録を収録した報告書です。

下古志遺跡は，出雲市下古志町に所在する弥生時代から続く集落遺跡で，隣接する古志本郷遺跡・田畑遺跡・古志遺跡・思案橋北遺跡とともに，市内有数の大規模な集落遺跡群「古志遺跡群」を構成する重要な遺跡です。古志遺跡群の中でも大きな面積を占める下古志遺跡の実態を明らかにすることは，出雲の集落遺跡研究においても重要であり，今回の調査成果が出雲地域の歴史を解明していく上での貴重な資料の一つとして活用されることが期待されます。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申しあげます。

2023（令和５）年３月

出雲市教育委員会

教育長　杉谷　学

例　言

1．本書は，2019（令和元）年度に出雲市教育委員会が実施した集合住宅新築工事に伴う下古志遺跡第４次発掘調査及び 2020（令和２）年度に実施したグループホーム新築工事に伴う下古志遺跡第５次発掘調査の成果をまとめた報告書である。

2．調査は下記の体制，期間で実施した。

【現地調査】

〇第４次調査

調査地及び調査面積　島根県出雲市下古志町５４８－４ほか　約 100㎡

調査期間　2019（令和元）年７月 29 日～８月８日（発掘調査）

調査体制　事務局　　木村　亨（出雲市市民文化部　次長兼文化財課課長）

景山真二（同　文化財課課長補佐兼埋蔵文化財１係係長）

調査員　　須賀照隆（同　文化財課主任）

発掘作業員　伊藤貴敏　江角和樹　大輝正人　星野篤志　渡部和憲

〇第５次調査

調査地及び調査面積　島根県出雲市下古志町７５１－６ほか　約 30㎡

調査期間　2020（令和２）年 11 月４日～ 12 月 14 日

調査体制　事務局　　片寄友子（出雲市市民文化部　次長兼文化財課課長）

大梶智徳（同　文化財課主査）

原　俊二（同　文化財課課長補佐兼埋蔵文化財２係係長）

調査員　　石原　聡（同　文化財課主任）

調査補助員　加藤章三 (同　文化財課会計年度任用職員)

発掘作業員　勝部誠　田邊宏行　寄廣和人

【報告書作成】＜ 2022（令和４）年度＞

事務局　　片寄友子（出雲市市民文化部　次長兼文化財課課長）

吾郷尚志（同　文化財課課長補佐）

調査員　　須賀照隆（同　文化財課埋蔵文化財１係長）

石原　聡（同　文化財課埋蔵文化財２係長）

調査補助員　加藤章三 (同　文化財課会計年度任用職員)

整理作業員　妹尾順子・前島浩子 (同　文化財課会計年度任用職員)

3．本書の編集は須賀が，執筆は職員の協力を得て第１～３章を須賀が，第４章を石原が行った。

4．本書に掲載した出土品の実測は，加藤が行った。

5．図面・遺物の整理作業は須賀，石原，加藤，妹尾，前島が行った。

6．本書に掲載した写真は，須賀，石原が撮影した。

7．本書に掲載した遺物及び実測図，写真は出雲市文化財課が保管している。

8．本書で使用した方位は，座標北を示す。座標は，世界測地系第Ⅲ系に基づくものである。標高は海抜高を示す。

9．本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。

SD －溝　SK －土坑　SP －柱穴　SI －竪穴住居　SE －井戸

10．本書を作成するにあたり，参考とした文献は各章末に記載した。

本文目次

第１章　遺跡の位置と環境 ……1

第１節　地理的環境 ……2

第２節　歴史的環境 ……2

第２章　古志遺跡群と既往の調査 ……4

第１節　古志遺跡群と調査地点の位置 ……4

第２節　これまでの調査 ……4

第３章　第４次発掘調査 ……9

第１節　調査に至る経緯と経過 ……9

第２節　調査の成果 ……10

第３節　結語 ……12

第４章　第５次発掘調査 ……13

第１節　調査に至る経緯と経過 ……13

第２節　調査の成果 ……14

第３節　結語 ……14

挿図目次

第１図　出雲平野の主要遺跡 ……2
第２図　古志遺跡群と調査地位置図 ……6 - 7
第３図　第４次調査調査区配置図 ……9
第４図　第４次調査土層堆積状況柱状図 ……10
第５図　第４次調査３・４区遺構実測図 ……11
第６図　第４次調査出土遺物実測図 ……12
第７図　調査地周辺図 ……13
第８図　第５次調査区平面図 ……16
第９図　第５次調査壁面セクション図 ……17
第10図　第５次調査遺構セクション図 ……18
第11図　第５次調査遺物実測図 ……19

挿表目次

第１表　古志遺跡群の主な調査歴一覧 ……5
第２表　第５次調査土器観察表 ……20

写真図版目次

図版１　４次調査　調査前
４次調査　１区完掘状況
図版２　４次調査　２区完掘状況
４次調査　３区完掘状況
図版３　４次調査　４区完掘状況
４次調査　出土遺物
図版４　５次調査　調査前
図版５　５次調査　調査前
５次調査　遺構検出状況
図版６　５次調査　SI01 掘り下げ状況
図版７　５次調査　SE12 掘上状況
図版８　５次調査　遺構掘り下げ状況
図版９　５次調査　出土遺物

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

下古志遺跡は出雲市下古志町地内に所在する集落遺跡である。出雲平野南西部，神戸川左岸の沖積地上に位置する。出雲平野は南北を中国山地と島根半島に，東西を宍道湖と日本海沿岸部の砂丘に挟まれた，東西約 20㎞，南北約５㎞にわたる県内最大の沖積平野である。平野を形成した二大河川，斐伊川と神戸川がそれぞれ中国山地から宍道湖と日本海に注いでいる。かつての出雲平野西部には，当時の斐伊川や神戸川が注ぐ大きな潟湖（『出雲国風土記』の神門水海）があり，現在とは大きく異なる景観が広がっていた。このような景観は弥生時代には既に形成視されていたと考えられる（第１図）。

第２節　歴史的環境

１　縄文時代

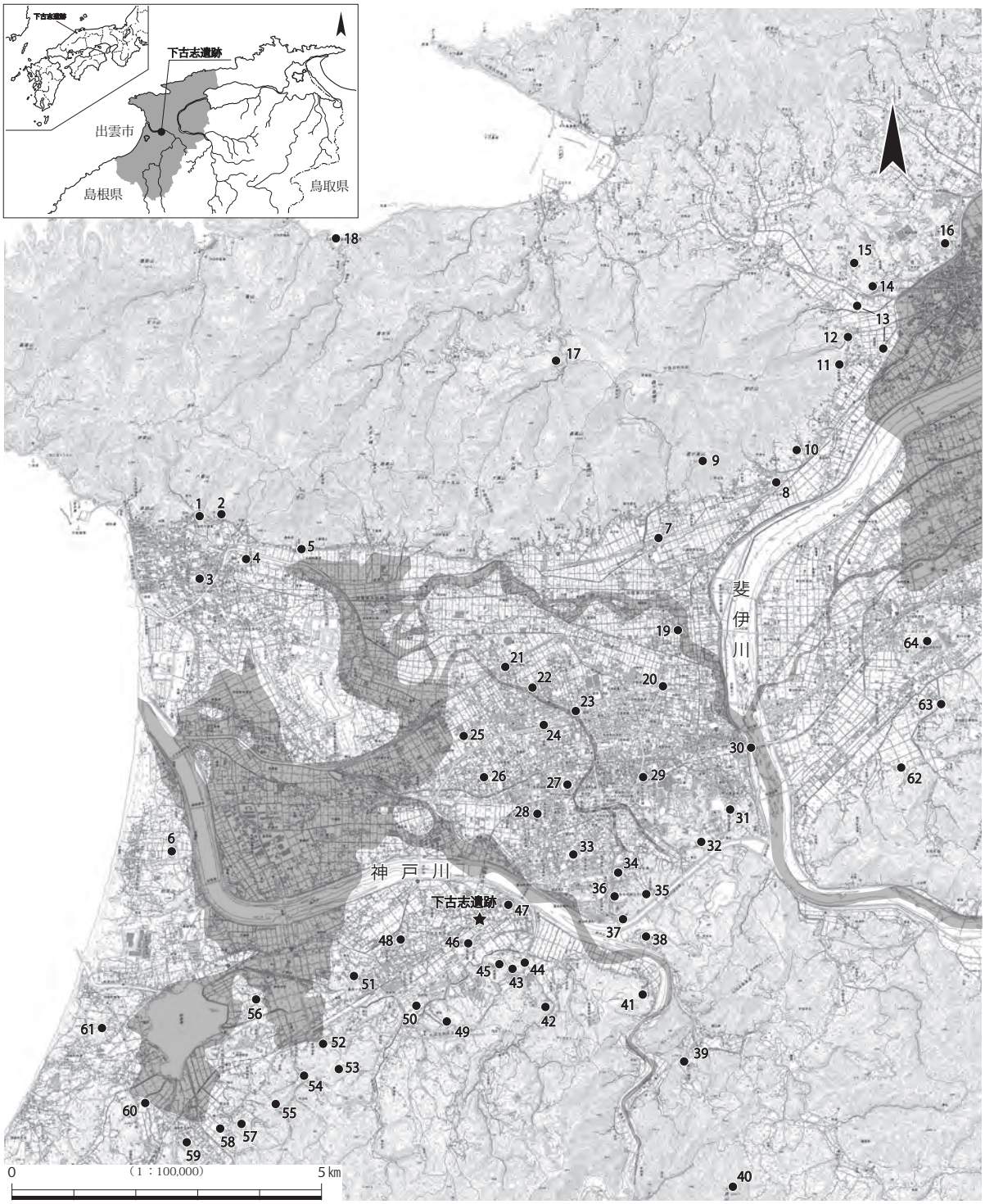
出雲平野における確実な遺跡の初現は，海進期にあたる縄文時代早期である。平野北部の山麓に所在する山持遺跡（第１図 7），菱根遺跡（第１図５）や平野西端の砂丘上に所在する上長浜貝塚（第１図６）などが知られている。中期までは山麓付近に数例の遺跡が確認されるのみである。その後，海退が進んだ後晩期になると遺跡数が増加し，山麓部付近を中心とした遺跡のほか，矢野遺跡（第２図 21），蔵小路西遺跡（第１図 24），壱丁田遺跡（第１図 26）など，平野中央部においても遺跡が確認されるようになる。

２　弥生時代

弥生時代になると平野部の集落が大きく発達する。縄文時代から継続して発達した矢野遺跡（第１図 21）などのほか，中期から後期を中心に急速に発達した白枝荒神遺跡（第１図 25），古志本郷遺跡（第１図 47），天神遺跡（第１図 28），中野清水遺跡（第１図 20），青木遺跡（第１図８）など，大規模な集落が平野部各所で展開されるようになった。当該期には，これらの大規模集落を中心に吉備や九州，朝鮮半島などとの交流を示す出土品が確認されており，出雲平野を中心に各地との活発な交流があったことがわかる。そのほか特筆すべき遺跡として，後期後葉以降の「王墓」とされる巨大な四隅突出型墳丘墓が築かれた斐伊川左岸丘陵上の西谷墳墓群（第１図 31）があげられる。

３　古墳時代

古墳時代に入ると，弥生時代から継続して営まれた平野部の大規模集落は中期までに急激な衰退をみせる。中・後期に継続，再興する集落も存在するが，弥生時代のような大規模な集落の存在は明確でない。一方，平野縁辺の山麓部においては三田谷Ⅰ遺跡（第１図 37）など，中期から後期にかけて



1. 出雲大社境内遺跡　2. 真名井遺跡　3. 鹿蔵山遺跡　4. 原山遺跡　5. 菱根遺跡　6. 上長浜貝塚　7. 山持遺跡　8. 青木遺跡　9. 鳶ヶ巣城跡
10. 大寺古墳　11. 上島遺跡　12. 国富中村古墳　13. 源代遺跡　14. 西西郷廃寺　15. 山根垣古墳　16. 平田城跡　17. 鰐淵寺境内
18. 猪目洞窟遺物包含層　19. 萩杼古墓　20. 中野清水遺跡・中野西遺跡　21. 矢野遺跡　22. 小山遺跡　23. 姫原西遺跡　24. 蔵小路西遺跡
25. 白枝荒神遺跡　26. 壱丁田遺跡　27. 海上遺跡　28. 天神遺跡　29. 今市大念寺古墳　30. 斐伊川鉄橋遺跡　31. 西谷墳墓群
32. 長者原廃寺・菅沢古墓　33. 神門寺境内廃寺跡　34. 上塩冶築山古墳・築山遺跡　35. 上塩冶横穴墓群　36. 上塩冶地蔵山古墳
37. 三田谷Ⅰ遺跡　38. 光明寺古墳群　39. 朝山古墓　40. 戸倉城跡　41. 小坂古墳・苅山古墳群　42. 栗栖城跡　43. 浄土寺山城跡　44. 放レ山古墳
45. 妙蓮寺山古墳　46. 宝塚古墳　47. 古志本郷遺跡・田畑遺跡　48. 知井宮多聞院遺跡　49. 深田谷横穴墓群　50. 浅柄遺跡　51. 神門横穴墓群
52. 御崎谷遺跡・九景川遺跡　53. 北光寺古墳　54. 麓Ⅱ遺跡　55. 神西城跡　56. 山地古墳　57. 常楽寺柿木田古墳　58. 御領田遺跡・京田遺跡
59. 三部竹崎遺跡　60. 西安原遺跡　61. 板津焼山遺跡　62. 後谷遺跡・稲城遺跡・小野遺跡　63. 上ヶ谷遺跡　64. 平野古墳群・平野横穴墓群

第１図　出雲平野の主要遺跡　※網掛けは弥生時代の推定水域

拡大をみせる集落が確認される。古墳については，前・中期において大寺古墳（第１図 10），山地古墳（第１図 56），常楽寺柿木田古墳（第１図 57），北光寺古墳（第１図 53）などが知られている。後期後半以降になると，神戸川右岸に今市大念寺古墳（第１図 29），上塩冶築山古墳（第１図 34）など，出雲地方西部最大級の古墳が次々と築造され，古墳の築造数も急激に増加する。この頃には横穴墓も盛んに造られ，神戸川右岸の上塩冶横穴墓群（第１図 35），左岸の神門横穴墓群（第１図 51）などで特に大規模な横穴墓群が築造された。

4　古代

古代の遺跡としては，特に『出雲国風土記』記載施設の関連遺跡が注目される。官衙関連遺跡としては神門郡家と推定される古志本郷遺跡（第１図 47），出雲郡家付属の正倉跡と推定される後谷遺跡周辺（第１図 62）などが知られる。寺院関連遺跡としては朝山郡郷新造院の可能性が指摘される神門寺境内廃寺（第１図 33）などがある。神門郡家関連遺跡と推定される三田谷Ⅰ遺跡（第１図 37），神社・官衙関連遺跡と推定される青木遺跡（第１図 8）なども当該期を代表する遺跡として挙げられよう。また，光明寺３号墓（第１図 38），小坂古墳（第１図 41），菅沢古墓（第１図 32），朝山古墓（第１図 39）といった，火葬骨を納めた骨臓器を持った墳墓が神門川両岸の丘陵地を中心に分布することも注目される。

5　中世

前代から続く出雲一宮である出雲大社（第１図１）やその別当寺であった鰐淵寺（第１図 17）の存在，出雲国守護佐々木氏が出雲平野の塩冶郷に守護所を移し塩冶氏を称したことにより，鎌倉時代後半の一時期は出雲国行政上の実質的な中心地となる。礎石建物や区画溝が発見された築山遺跡（第１図 34），青磁優品が副葬された荻杼古墓（第１図 19）などは塩冶氏関連遺跡とみられる。蔵小路西遺跡（第１図 24）においては有力な国衙在庁官人であった朝山氏の居館と推定される館跡も発見されている。また，室町時代から戦国時代を中心に，毛利氏が尼子攻略戦の際に拠点とした鳶ヶ巣城跡（第１図９），神西氏代々の居城で尼子十旗にも数えられる神西城跡（第１図 55），国人衆でありながら尼子家臣のように扱われた古志氏の居城とされる浄土寺山城跡（第１図 43），栗栖城跡（第１図 42）など，数多くの山城が築かれた。

参考文献

髙橋周 2011「弥生時代の出雲平野における水域復元」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第１集　出雲弥生の森博物館

出雲市教育委員会 1997『遺跡が語る古代の出雲』

出雲市古志町誌編纂委員会 1990『古志町誌』

島根県教育委員会 1980『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』

第２章　古志遺跡群と既往の調査

第１節　古志遺跡群と調査地点の位置

下古志遺跡は隣接する古志本郷遺跡・田畑遺跡・古志遺跡・思案橋北遺跡と一体的な広がりを持つ（第２図）。これらは出雲市下古志町から古志町にまたがって約 70ha にもなる大規模な集落遺跡群を構成しており，この集落遺跡群は「古志遺跡群」と総称されている。遺跡群のほぼ全域にわたって弥生時代中期～古墳時代初頭と古代～中世の遺構・遺物が特に多く確認されており，古墳時代の一時期を除き，出雲平野の中でも有数の規模を誇った集落である。なお，古墳時代後期においても遺跡群周辺には主要な古墳が点在しており，地域的な重要性は継続していたものと考えられる。今回報告する調査地は古志遺跡群の北西部，下古志遺跡西部における第４・５次発掘調査地点である。

第２節　これまでの調査

古志遺跡群においては，2022（令和４）年 12 月時点で下古志遺跡で６次，田畑遺跡で２次，古志本郷遺跡で 14 次，古志遺跡で１次にわたる発掘調査が実施されている（第２図）。各調査の時期及び主な成果については第１表のとおりである。

この内，下古志遺跡と古志本郷遺跡については特に広域な調査が実施されているため，以下に両遺跡を中心として調査成果の概略を述べる。

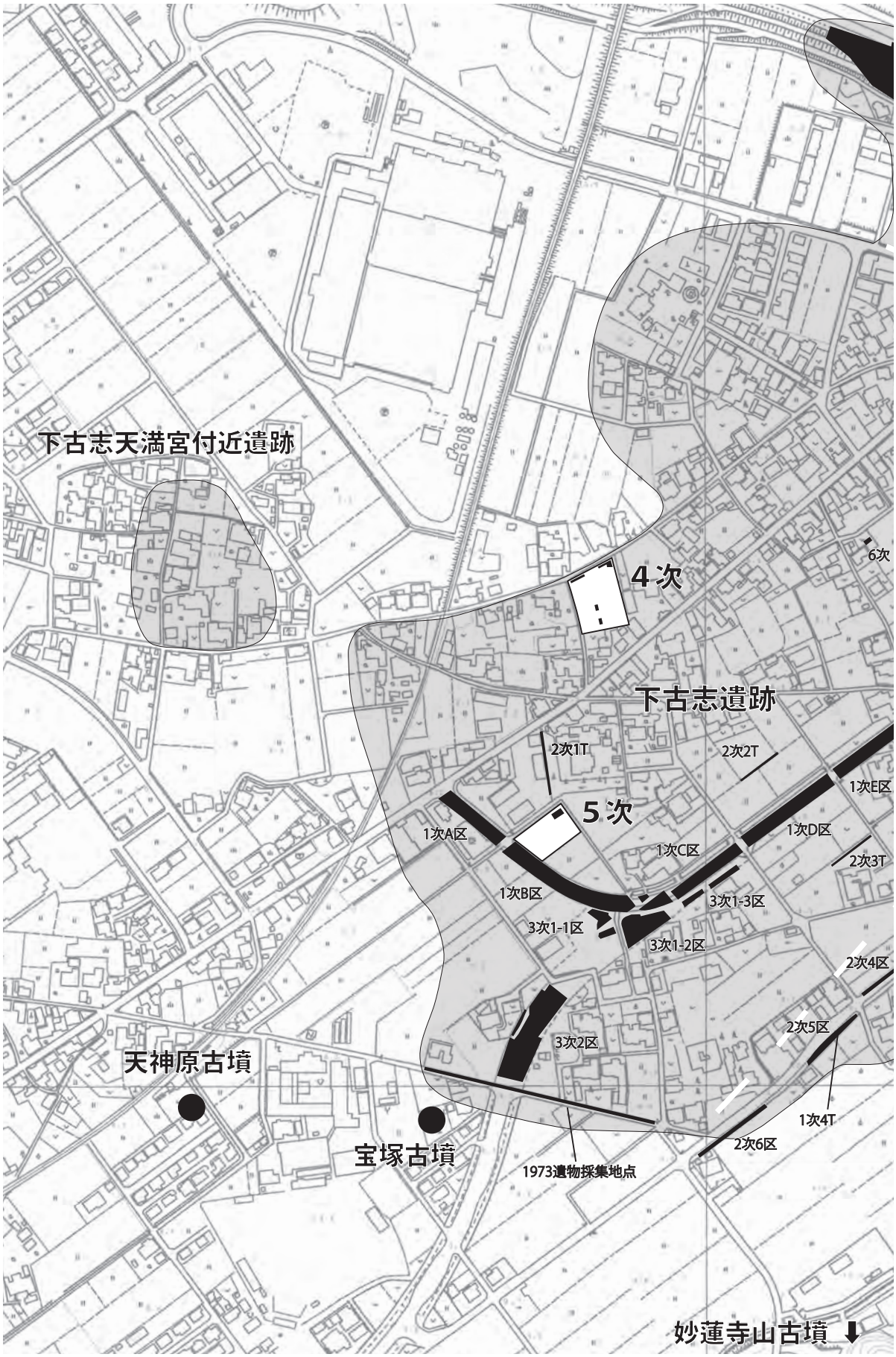
遺跡群西部に広がる下古志遺跡では，県道整備事業に伴い出雲市教育委員会が実施した第１次発掘調査が最も大規模な調査で，弥生時代中期中葉～古墳時代初頭，古代～中世の遺構・遺物が多数確認された。当初は正蓮寺北遺跡として調査が開始されたが，その広がりが確認されたことにより周辺にあった上組遺跡・弘法寺参道付近遺跡を含む新たな遺跡名として平成 11（1999）年に「下古志遺跡」と命名された。弥生時代中期から古墳時代初頭にかけては，１次調査Ａ・Ｄ・Ｅ区を中心に多条の大溝が確認され，大溝間のＡ～Ｃ区において竪穴建物・布掘建物等が集中していることも確認された。当該期における外来系遺物の存在も注目される。下古志遺跡第２・３次調査と田畑遺跡第１・２次調査の結果も総合すると，当該期下古志遺跡第１次調査Ａ区北端付近からＤ・Ｅ区付近へ，Ｄ・Ｅ区付近から田畑遺跡第２次調査２・３区付近へと連続する多条の溝が存在したと考えられ，その南西に建物跡が集中するようである。また，下古志遺跡第３次調査２区では東西方向にのびる多重の溝も確認されている。その後，古墳時代中期以降は遺構・遺物は極端に減少し，古代から中世にかけて再発達の様相を見せる。

遺跡群東部に広がる古志本郷遺跡では，治水事業に伴い島根県教育委員会が実施した第５・７～10・12・13 次調査が最も大規模な調査である。弥生時代中期～古墳時代前期，古代，中世後半を中心に多数の遺構・遺物確認されたほか，第９・10 次調査Ｇ・Ｈ区で弥生時代前期の溝も確認されており，集落の初現が弥生時代前期まで遡ることが明らかとなった。弥生時代中期から後期にかけて集

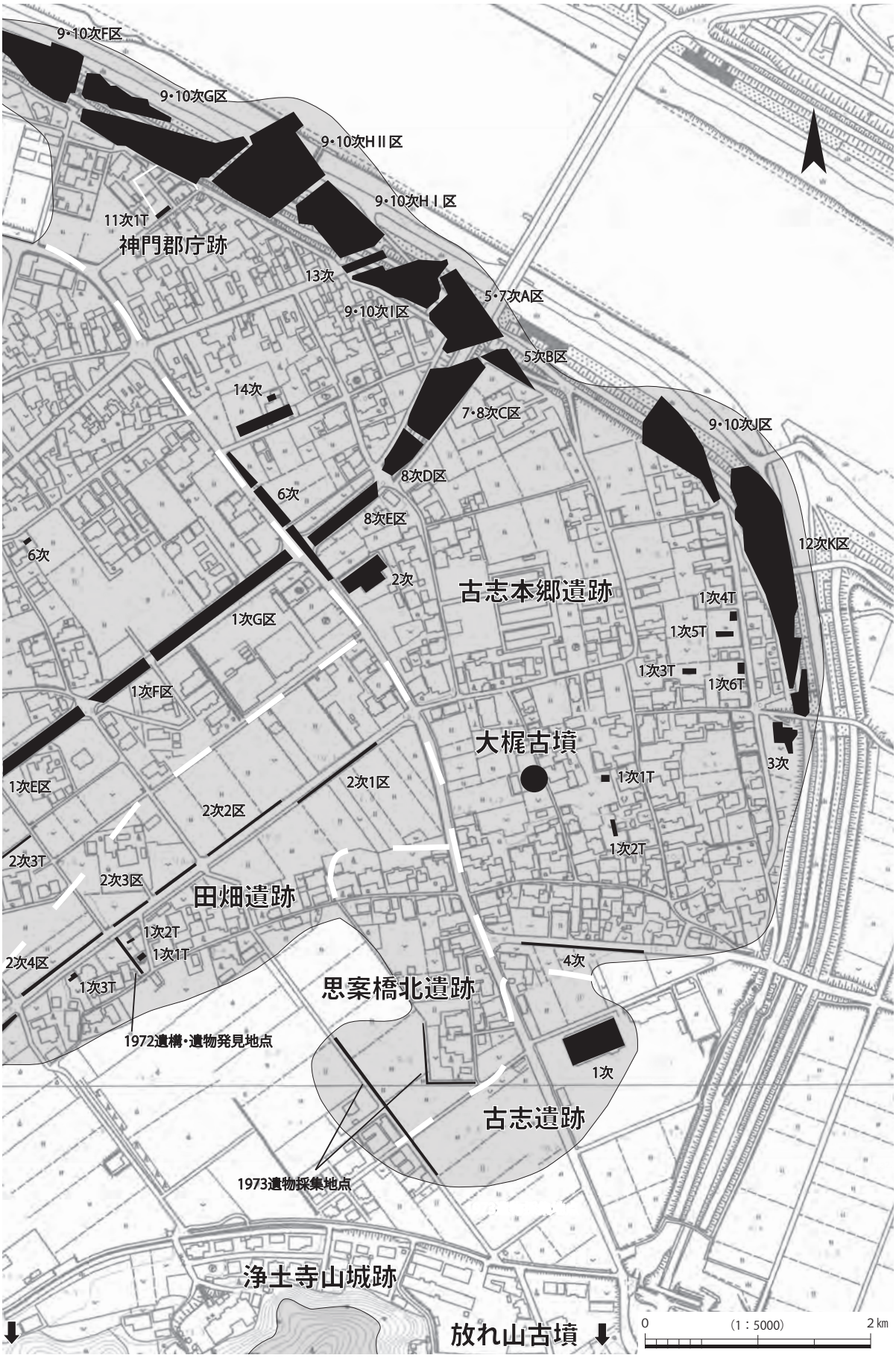
落は急速に発達し，南東－北西方向の大溝を伴う大規模集落となる。当該期の建物跡は弥生時代中期には第８次調査Ｅ区周辺に，後期から古墳時代前期にかけては第９・10・12 次調査Ｊ・Ｋ区周辺と第９・10 次調査Ｈ区周辺に集中するようである。古墳時代前期の内には大溝の廃絶を伴う集落の衰退も確認される。当該期には外来系遺物の存在も確認され，下古志遺跡との類似した集落の様相を示している。その後，古代になると第９・10 次調査Ｇ区とその周辺調査区で神門郡庁と郡家関連施設と推定される建物群が確認されており，神門郡における政治の中心地であったと考えられている。さらに，中世後半期には第５・７・８次調査Ａ・Ｃ～Ｅ区，や第９・10 次調査Ｈ区などで多くの建物跡が確認され，その周辺調査区からは広域流通品である輸入陶磁器や国産陶磁器も出土しており，出雲古志氏との関連が指摘されている。その後の出雲市教育委員会による第 14 次調査においては，中

第１表　古志遺跡群の主な調査歴一覧

遺跡名	次数	年度（西暦）	調査主体	調査区等	主な成果	文献
下古志遺跡	1	1995-1997	出雲市	Ａ～Ｇ区	～古墳時代前期の大溝 ～古墳時代前期・古代・中世の建物等	出雲市教委 2001
	2	1999	出雲市	１～３Ｔ	～古墳時代前期の大溝等	出雲市教委 2002
	3	2010	島根県	１・２区	～古墳時代前期の溝・建物，中世の建物等	島根県 2012
	4	2019	出雲市		本書	本書
	5	2020	出雲市		本書	本書
	6	2022	出雲市		中世遺構・和鏡等	未報告
	－	1973	個人	工事中採集	弥生時代～中世遺物少量	三原 2021
古志本郷遺跡	1	1987	出雲市	１～６Ｔ	～古墳時代前期の遺構等（３Ｔ遺物多量）	出雲市教委 1988
	2	1990	出雲市		弥生時代の建物等	出雲市教委 1994
	3	1993	出雲市		遺構遺物少量	出雲市教委 1995
	4	1995	出雲市		遺構少量，古代遺物中心	出雲市教委 1999
	5	1995	島根県	Ａ・Ｂ区	古墳時代前期・中世の建物等	島根県教委 1999
	6	1995	出雲市		～古墳時代前期の大溝	出雲市教委 1998
	7	1996	島根県	Ａ・Ｃ区	～古墳時代の大溝，古代中世の建物等（Ｃ区）	島根県教委 1999
	8	1997	島根県	Ｃ～Ｅ区	弥生時代・中世の建物等（Ｄ・Ｅ区）	
	９・10	1998-2000	島根県	Ｆ・Ｇ区	神門郡家跡及び関連施設等 弥生時代前期・古墳時代前期・後期の溝等	島根県教委 2003a
			島根県	Ｈ区	弥生時代前期・～古墳時代前期の溝 ～古墳時代前期・古墳時代後半～中世建物等	島根県教委 2001a
			島根県	Ｊ区	弥生時代の建物，古墳時代後半～古代建物等	
			島根県	Ｉ区	～古墳前期の溝等	島根県教委 2001b
	11	1999	出雲市	１Ｔ	神門郡庁跡に伴う柱穴等	出雲市教委 2002
	12	1999-2000	島根県	Ｋ区	～古墳時代前期の溝・建物等	島根県教委 2003b
	13	2001	島根県		～古墳時代前期・中世の溝等	島根県教委 2002
	14	2021	出雲市		中世館跡等	2023 報告予定
田畑遺跡	1	1988	出雲市	１～４Ｔ	弥生時代の溝（１Ｔ）・建物（３Ｔ）	出雲市教委 1989
	2	1997-1998	出雲市	１～６区	弥生時代の溝等，中世遺構等	出雲市教委 2000
	－	1972	個人	工事中採集	柱穴・弥生土器等	東森 1973
古志遺跡	1	2003	出雲市		古代の建物等	出雲市教委 2005
思案橋北遺跡	－	1973	個人	工事中採集	古代瓦（一部古志遺跡か）	三原 2021



第２図　古志遺跡群と調査地位置図


9・10次F区
9・10次G区
9・10次HⅡ区
9・10次HⅠ区
11次1T
神門郡庁跡
13次
5・7次A区
9・10次I区
5次B区
14次
7・8次C区
9・10次J区
8次D区
6次
8次E区
12次K区
6次
2次
古志本郷遺跡
1次4T
1次5T
1次G区
1次3T
1次6T
1次F区
大梶古墳
3次
1次1T
1次E区
2次1区
2次2区
1次2T
2次3T
2次3区
田畑遺跡
1次2T
1次1T
2次4区
4次
1次3T
思案橋北遺跡
1972遺構・遺物発見地点
1次
古志遺跡
1973遺物採集地点
浄土寺山城跡
放れ山古墳
0
(1：5000)
2㎞

世後半期の館跡に伴うと考えられる溝も確認された。

その他，注目すべき遺跡として遺跡群南部の思案橋北遺跡がある。昭和 48（1973）年，工事中に採集された多量の古代瓦の存在から，『出雲国風土記』記載の古志郷新造院がこの付近に存在していた可能性が指摘されている。

参考文献

髙橋周 2011「弥生時代の出雲平野における水域復元」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第１集　出雲弥生の森博物館

東森市良 1973「破壊に瀕している低湿地遺跡」『季刊文化財』第 20 号　島根県文化財愛護協会

三原一将 2021「寄贈資料の古志遺跡群出土遺物について」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第９集　出雲弥生の森博物館

出雲市教育委員会 1988『古志地区遺跡分布調査報告書』

出雲市教育委員会 1989『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』

出雲市教育委員会 1994『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第４集

出雲市教育委員会 1995「古志本郷遺跡」『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第５集※古志本郷３次

出雲市教育委員会 1998『市道本郷新宮線道路改良工事に伴う古志本郷遺跡第６次発掘調査報告書』

出雲市教育委員会 1999『古志地区土地改良総合事業地内古志本郷遺跡発掘調査報告書』

出雲市教育委員会 2000『田畑遺跡』市道浅柄古志線歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

出雲市教育委員会 2001『下古志遺跡』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

出雲市教育委員会 2002『古志本郷遺跡　下古志遺跡』平成 11 年度古志遺跡群範囲確認調査報告書

出雲市教育委員会 2005『古志遺跡』古志運動広場等整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島根県教育委員会 1999『古志本郷遺跡Ⅰ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

島根県教育委員会 2001a『古志本郷遺跡Ⅱ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ

島根県教育委員会 2001b『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ

島根県教育委員会 2002『古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ

島根県教育委員会 2003a『古志本郷遺跡Ⅴ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ

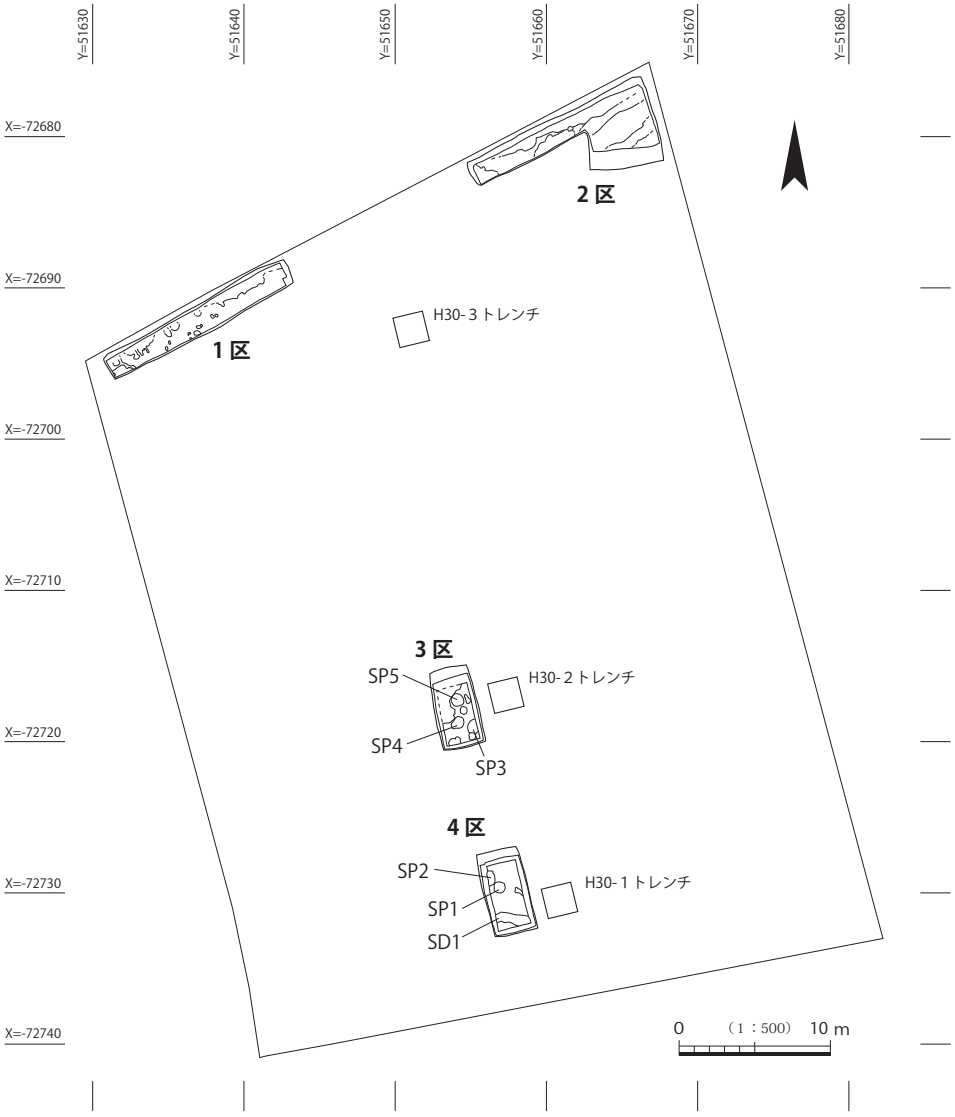
島根県教育委員会 2003b『古志本郷遺跡Ⅵ』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ

島根県教育委員会　2012『下古志遺跡（第３次調査）』一般県道多伎江南出雲線地域活力基盤創造交付金（交通安全）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第３章　第４次発掘調査

第１節　調査に至る経緯と経過

2017（平成 29）年，出雲市下古志町地内の開発計画地について事業予定者から埋蔵文化財に係る協議を受けた。予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である下古志遺跡の範囲内であることから，事前に確認調査を実施することとし，翌年２月２日に出雲市文化財課において重機による確認調査を実施した。調査の結果，遺物は出土しなかったが３箇所全ての調査地点で遺構が残存し，中世以前の遺構が含まれる可能性が高いと判断した。その後事業主体者及び計画内容の変更経て，集合住宅新築工事が新たに計画されることとなったため，事業者と出雲市文化財課で再度協議を重ね，2019（令和元）年７月から本発掘調査を実施することとなった。



第３図　第４次調査調査区配置図

発掘調査は，事業用地約 2,200㎡の内，遺跡への影響が大きい擁壁基礎工と浄化槽埋設工予定範囲の４所計約 100㎡を対象とし，2019 年７月 29 日～同年８月８日の期間で実施した。調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果，遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。

＜第４次発掘調査に関連する主な文化財保護法上の文書等＞※全て 2019（平成 31・令和元）年

２月　４日　「埋蔵文化財発掘の通知について」事業者から市教委経由で県教委へ

２月 19 日　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について (通知)」県教委から市教委経由で事業者へ

７月 23 日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ

８月　８日　「埋蔵物発見届」市教委より出雲警察署へ

８月　８日　「埋蔵文化財保管証」市教委より県教委へ

８月　８日　「下古志町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて (協議)」市教委より県教委へ

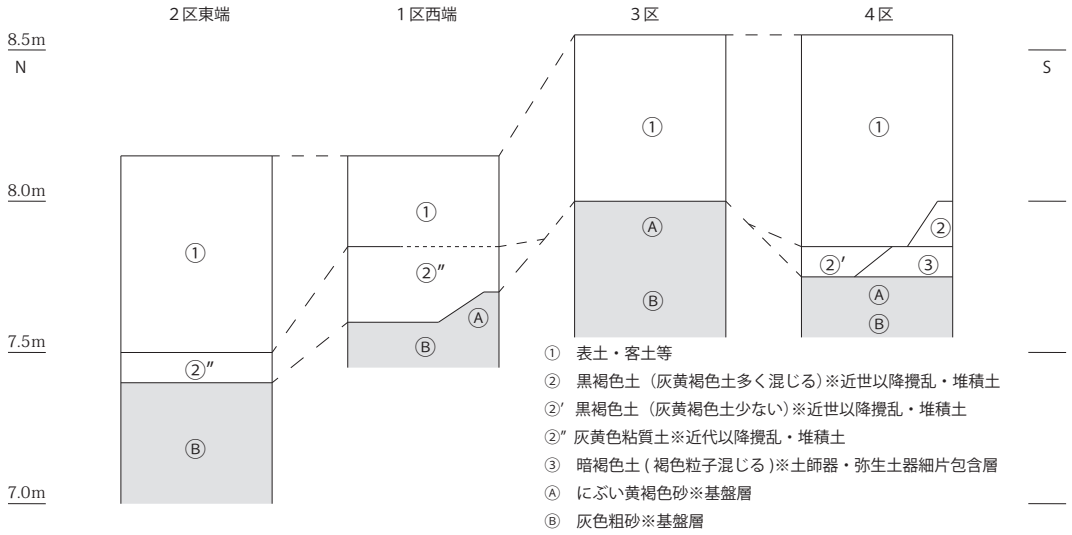
８月 14 日　「遺跡の取り扱いについて（回答)」県教委より市教委へ

８月 21 日　「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委より市教委へ

第２節　調査の成果

１　調査の概要（第３・４図）

調査は，重機により表土を掘削した後，手掘りによって徐々に掘り下げ，遺構・遺物の検出を行った。調査区は事業地北西部の擁壁工部を１区，北東部の擁壁工部及び浄化槽工部を２区，南部の浄化槽工部を北から３・４区と呼称する。



第４図　第４次調査土層堆積状況柱状図

基本層序は，上から①褐色～黒褐色土（表土・客土等）②灰黄褐色土混じり黒褐色土･灰色黄色粘質土（近世以降堆積土等）③暗褐色土（遺物包含層）を経て，遺構基盤層である砂層・砂質土層に至る。基盤層は北へ向けて低くなる。③層上面においても遺構は確認できるが，近世以降の可能性がある。なお，調査対象地全域において後世の掘削を相当量受けており，１～３区では③層は残存していない。

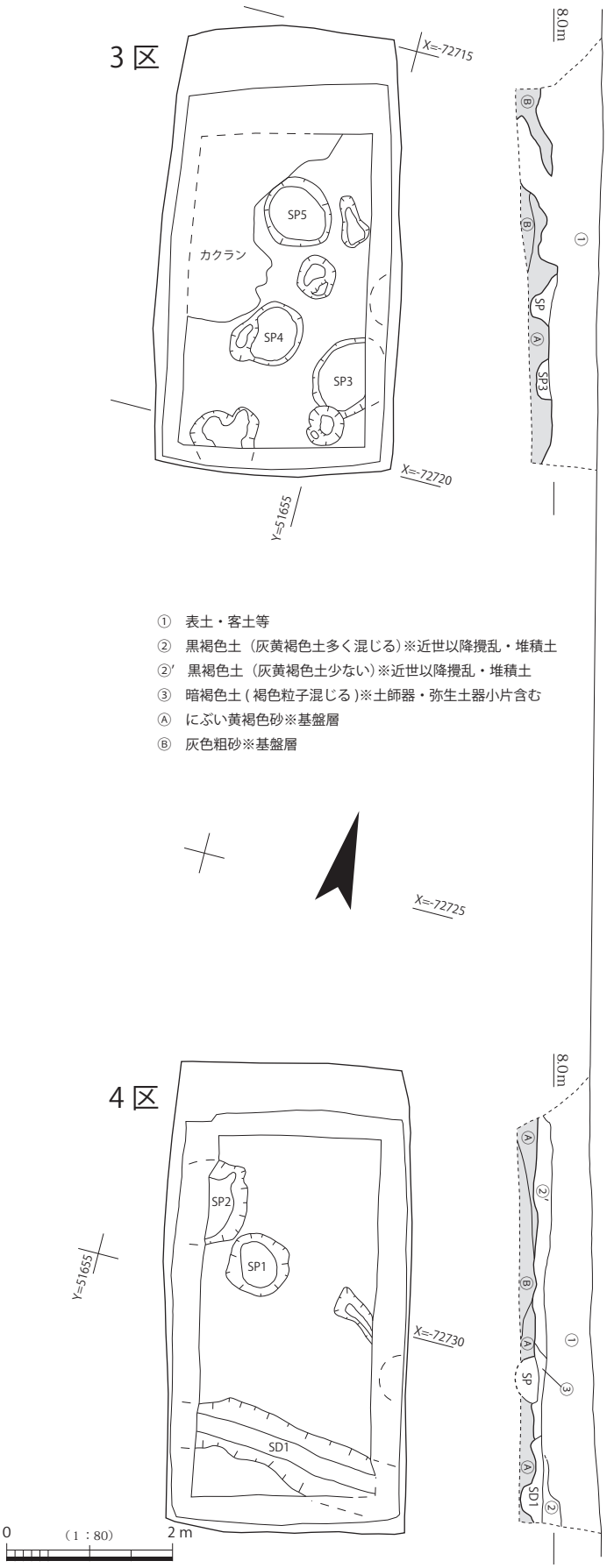
遺構は近世以降に掘削されたものが大半であるが，３・４区で確認した遺構群は比較的古い遺構を含むと考えられる。１・２区においては遺物を含むほとんどの土層で近世末～近代の遺物が確認され，中世以前の遺構は残存していないと考えられる。いずれの調査区も遺物は極めて少量である。

２　遺構と遺物（第５・６図）

前述のとおり，１・２区の遺構は近世以降のものと考えられ，中世以前の遺構は３・４区においてのみ確認できる。

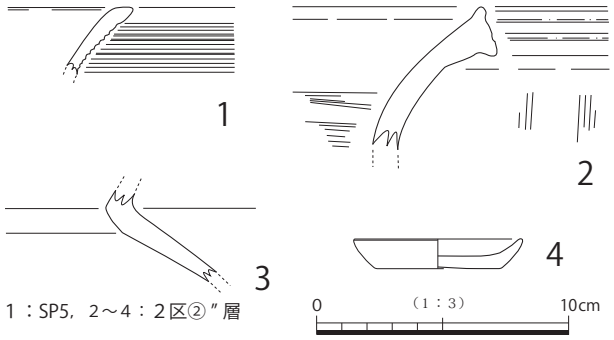
３・４区ピット群（第５図，図版２・３）

３・４区ピット群の内，ＳＰ１・２は③層下面から掘り込まれた遺構で，ＳＰ３～５はＳＰ１・２と類似した埋土を有する遺構である。いずれも直径70～95㎝，深さ 15 ～ 20㎝程度を測る規模の類似したピットである。ＳＰ１とＳＰ５では弥生土器等の小片が出土している。出土遺物は必ずしも掘削時期を示すものではないが，③層には小片ながら土師器・弥生土器のみしか確認されておらず，中世以前の遺構である可能性が高い。



第５図　第４次調査３・４区遺構実測図

４区ＳＤ１（第５図・図版２）　４区で確認したＳＤ１は幅 70㎝前後，深さ約 15㎝を測る。③層上面からの掘削でありＳＰ１～５よりも新しい遺構であるが，現在の地割方向と異なったほぼ東西方向に伸びている。③層上面遺構の中でも比較的古い遺構であろうか。遺物は出土していない。



第６図　第４次調査出土遺物実測図

出土遺物（第６図，図版４）　出土遺物は全て小片であり，図化できた資料は第６図に示した４点のみである。１は３区Ｐ５から出土した弥生土器甕・器台等の口縁部片で，端部をやや丸くおさめ，外面に擬凹線が施されている。弥生時代後期後葉の資料と考えられる。２～４は２区の②″層から出土した資料で，近世～近代の遺物と混在して出土している。２は弥生土器壺の口縁部である。端部拡張部に２状の凹線文が，内外面にはハケメ・ナデが施される。弥生時代中期後葉の資料と考えられる。３は弥生土器甕等の頸部から肩部にかけての破片であるが，風化著しく詳細不明である。４は土師質土器の小皿である。復元口径 6.6㎝，高さ１．２㎝を測り，底部には糸切り痕が残る。14 世紀頃の資料であろう。

第３節　結語

今回の調査地では出土遺物が極めて少量でであり，遺構の時期も不明確であった。しかしながら３・４区においては弥生時代まで遡る可能性を持つ遺構が存在し，２区遺構外出土遺物においては弥生時代中期後葉の資料も確認できた。調査地周辺で弥生時代から人々の暮らしが営まれていたことは確実である。また，１・２区において中世期以前の遺構が全く確認できないことから，その生活範囲の境界はは３区と１・２区の間にあると推定できる。現況地形も踏まえて想定されてきた下古志遺跡の北端とほぼ同様の遺跡範囲が確認できたことは貴重な成果といえる。

第４章　第５次発掘調査

第１節　調査に至る経緯と経過

令和２年１月 29 日に埋蔵文化財の照会を受けた。照会の目的は、グループホーム建設である。第１次調査の道路建設に伴う発掘調査の結果から、周辺に遺跡が存在する可能性は高く、浄化槽部分について本発掘調査を次年度後半に農地転用の許可を経た後で実施することとなった。

発掘調査は，事業用地約 2,460㎡の内，遺跡への影響が大きい浄化槽埋設工予定範囲の 30㎡を対象とし，2020 年 11 月４日～同年 12 月 14 日の期間で実施した。調査後に島根県教育委員会との協議を行った結果，遺跡を記録保存に留めることはやむを得ないとの判断に至った。

＜第５次発掘調査に関連する主な文化財保護法上の文書等＞※全て 2020（令和２）年

８月 26 日　「埋蔵文化財発掘の通知について」事業者から市教委経由で県教委へ

９月　７日　「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について (通知)」県教委から市教委経由で事業者へ

10 月 27 日　「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ

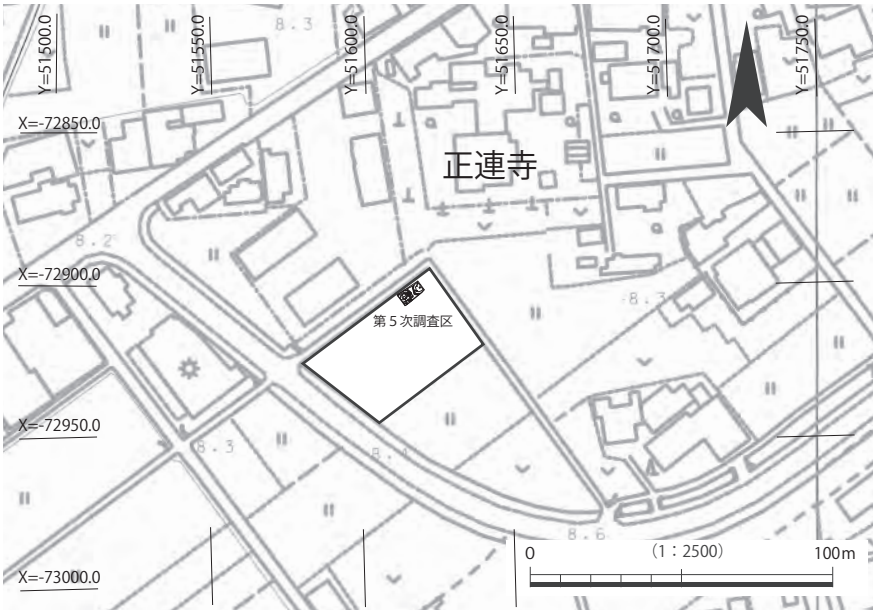
８月　８日　「埋蔵物発見届」市教委より出雲警察署へ

８月　８日　「埋蔵文化財保管証」市教委より県教委へ

８月　８日　「下古志町地内集合住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて (協議)」市教委より県教委へ

８月 14 日　「遺跡の取り扱いについて（回答)」県教委より市教委へ

８月 21 日　「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委より市教委へ



第７図　調査地周辺図

第２節　調査の成果

弥生時代終末から古墳時代初頭頃の竪穴住居跡１軒（SI01）、奈良・平安時代の井戸１基（SE12）と溝状遺構１条（SD06），その他土坑４基などを確認した。

竪穴住居跡ＳＩ０１（第８～10図，図版６・８）　平面形状が隅丸方形で、深さ30㎝程度と浅い。調査区内で南北420㎝,東西340㎝を確認している。床面から弥生時代後期から古墳時代前期の土器(第11－３～５）が出土しており，遺構の時期は弥生時代終末から古墳時代前期頃と推定する。床面には、最大厚10㎝の黄褐色土と黒褐色土の貼り床が確認できるほか、周囲に深さ10㎝，幅28～58㎝程度の周溝も確認できる。SI01の床面で柱穴と考えられる遺構（SP14・SP16）を確認しているが，住居跡の一部しか調査していないため，柱穴の並びなどは不明である。

井戸ＳＥ１２（第８・10図，図版７）　上面検出時で南北270㎝、東西200㎝で、深さは約100㎝である。木製井戸枠などは出土していないが､中心部に80㎝×60㎝の方形の掘り込みがあることから、この部分が井戸側であった可能性がある。遺構の時期は、覆土出土の須恵器高台付き杯や赤彩土師器杯（第11－８・９）などから、奈良・平安時代と推定する。

溝状遺構ＳＤ０６（第８・９図，図版８）　調査区南側隅で確認した。溝上端幅最大120㎝、深さ80㎝である。西側から南方にカーブして、先のすぼまる形状である。遺構の時期は、覆土出土の須恵器盤・赤彩土師器高杯（第11－10・11）などから、奈良・平安時代と推定する。

出土遺物（第11図，図版９）　１～６は，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての弥生土器・土師器で，竪穴住居跡SI01とその周辺から出土している。１は遺構検出時に出土した弥生土器高杯の口縁部，２は竪穴住居跡SI01の覆土から出土した弥生土器高杯の口縁部である。３～５は竪穴住居跡SI01床面直上から出土した弥生土器・土師器で，３が甕類の口縁部，４が高杯等の口縁部，５が器台等の脚部である。６は遺構検出時に出土した複合口縁の土師器甕である。

７は遺構検出時に竪穴住居跡SI01付近から出土した土師器の甕である。全体の約５分の１が残存しており，完形に復元できる。口径の割に器高が低く丸みをおびた体部で，底部は丸底である。古代期の土師器であり，竪穴住居跡SI01に伴う遺物ではないと考えられる。

８・９は井戸SE12の覆土から出土した須恵器・土師器である。８が須恵器の高台付き杯，９が土師器の杯で，９の内外面には赤色塗彩が残る。

10・11は溝状遺構SD06の覆土から出土した須恵器・土師器である。10が須恵器の盤，11が土師器高坏の杯部と脚部との接合部で，11の内外面には赤色塗彩が残る。

第３節　結語

現地表（厚さ50㎝の真砂土盛土を除く）下約30㎝で確認した遺構面では，大きく２時期の遺構が確認できた。ひとつは弥生時代終末から古墳時代前期（竪穴住居跡SI01），もうひとつは奈良・平安時代（井戸SE12，溝状遺構SD06）である。

今回の調査区は，下古志遺跡の西部に位置する。隣接地の調査（第２図・出雲市教育委員会2001・

2002）を見ると，調査地西方における第１次調査Ａ区においては弥生時代後期の竪穴住居が，調査地南方における第１次調査Ｂ区においては今回の調査地と同時期である弥生時代終末から古墳時代前期にかけての竪穴住居が確認されている。今回の調査地から第１次調査Ｂ区を含む範囲が，弥生時代終末から古墳時代前期にかけての居住域であったことがわかる。

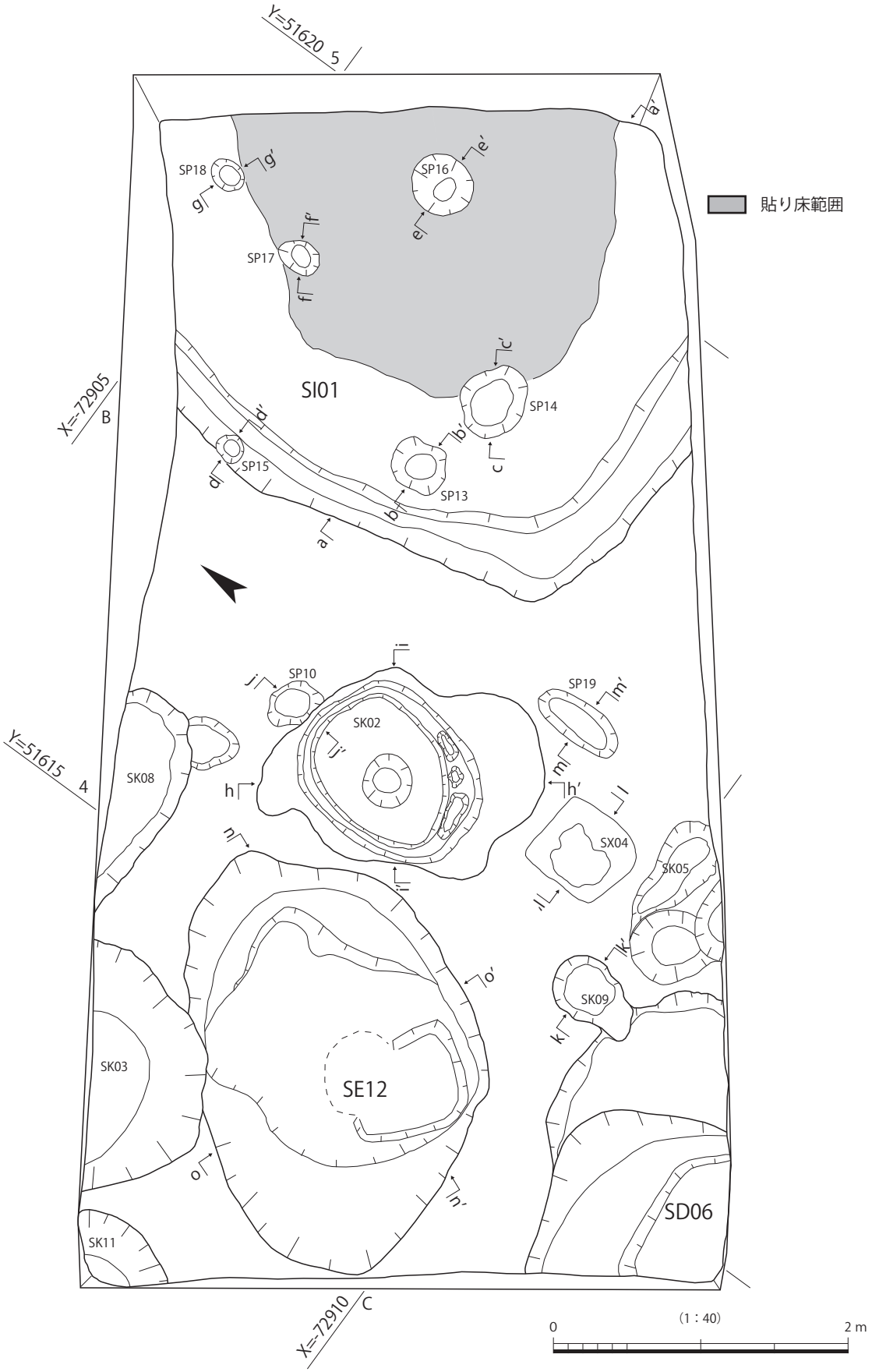
また，奈良・平安時代には遺跡西部にあたる第１次調査Ａ・Ｂ・Ｄ区で井戸跡などが確認されているほか，Ａ区で東西方向に平行走る２条の溝が，Ｂ区で第１次調査唯一となる当該期の建物跡が確認されている。今後本調査区周辺の発掘調査によって建物跡，井戸，溝の関連性がわかる成果が出てくることが期待される。

今回の発掘調査は，グループホーム建設に伴う浄化槽設置予定部分約 30㎡と限られた範囲の調査であったが，竪穴住居跡の一部や井戸，溝跡など遺構の密度が非常に高いことがわかった。下古志地域においても現在新しい店舗や住宅が増えるに従い，発掘調査件数が増加することも予想される。下古志遺跡の全体像の把握のためにも注視していきたい。

参考文献

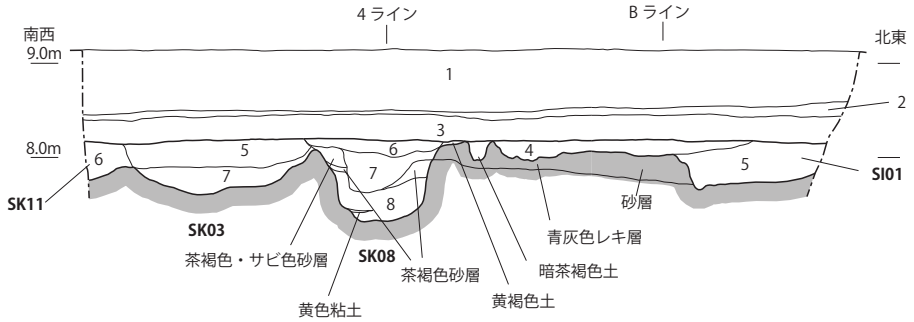
出雲市教育委員会 2001『下古志遺跡』一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

出雲市教育委員会 2002『下古志遺跡―考察編―』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 12 集

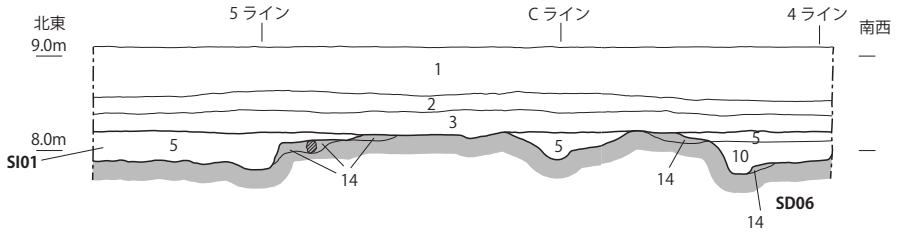


第８図　第５次調査区平面図

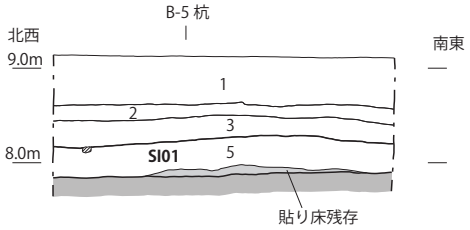
北西壁面セクション



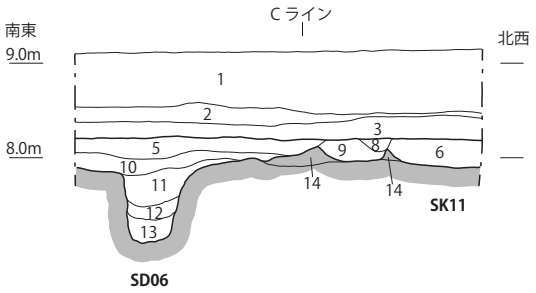
南東壁面セクション



北東壁面セクション



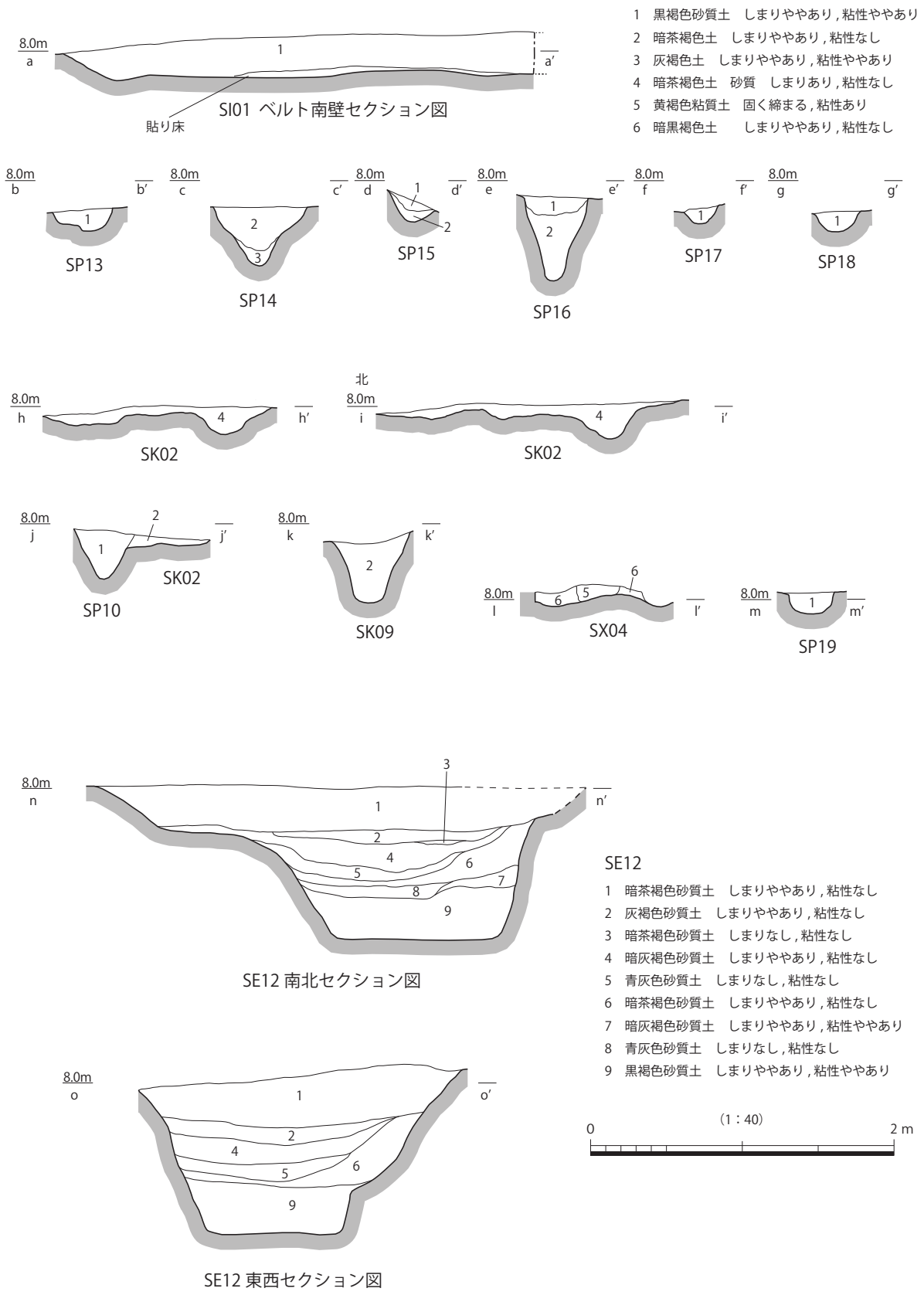
南西壁面セクション



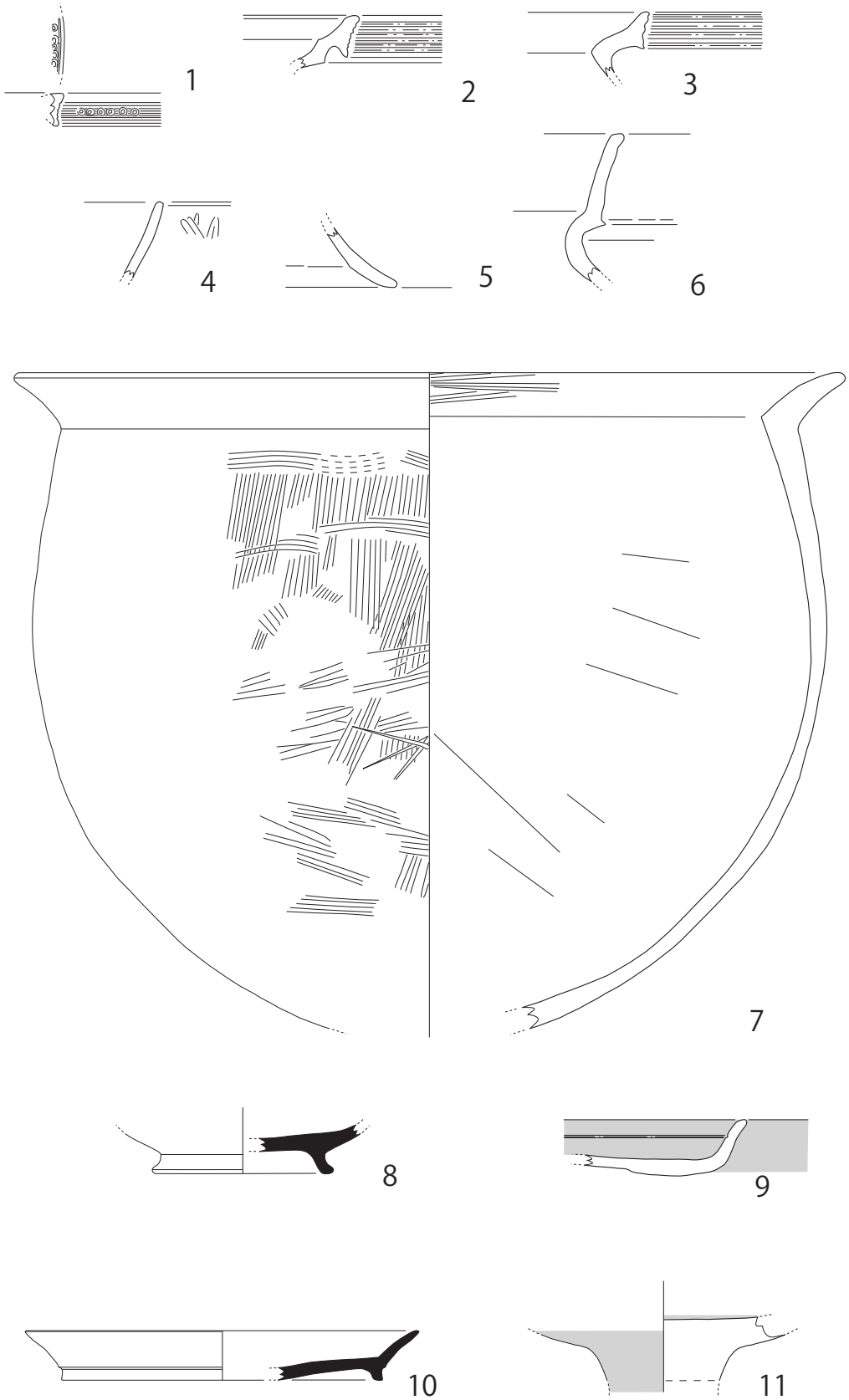
1　真砂土 (盛土)
2　黒褐色土 (耕作土) 表土
3　暗茶褐色土 (近世～古代の土器混じる)
4　暗茶褐色土
5　黒褐色土 (遺構)
6　黒褐色土 (遺構)
7　暗灰褐色土　茶褐色土混じる（遺構）
8　黒褐色土 (遺構)
9　暗茶褐色土 (遺構)
10 暗灰褐色土 (遺構)
11 灰褐色土 (遺構)
12 黒褐色砂質土　粘性あり (遺構)
13 青灰色砂質土 (遺構)
14 黄褐色砂質土

0　(1：80)　2 m

第９図　第５次調査壁面セクション図



第 10 図　第 5 次調査遺構セクション図



第 11 図　第 5 次調査遺物実測図

0　(1：3)　10cm

第２表　第５次調査土器観察表

挿図番号	遺構番号	器　種 残存率	層位	計測値(cm)	焼成	調整	色調	備考
1	SI01	弥生土器 口縁部破片	遺構検出面		良好	外面　竹管文	外面　にぶい黄橙(10YR,7/4)～ 黒(10YR,2/1)	割れの為,内部不明
2	SI01	弥生土器 口縁部破片	遺構覆土		良好	外面　凹線,ナデ 内面　ミガキ→ナデ	外面　黒褐(7.5YR,3/2) 内面　灰褐(5YR,4/2)	
3	SI01	弥生土器 口縁部破片	床面直上		良好	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　橙(7.5YR,7/6) 内面　明黄褐(10YR,7/6)	
4	SI01	弥生土器 口縁部破片	床面直上		良好	外面　凹線,ナデ 内面　ナデ	外面　浅黄橙(10YR,8/3) 内面　灰白(10YR,8/2)	
5	SI01	弥生土器 脚部破片	床面直上		良好	外面　風化著しい 内面　風化著しい	外面　浅黄橙(10YR,8/3) 内面　灰白(10YR,8/2)	
6	SI01	弥生土器甕 口縁部破片	遺構検出面 上層		良好	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　橙(7.5YR,7/6) 内面　明黄褐(10YR,7/6)	
7	SI01	土師器甕 約1/5残存 反転復元	遺構検出面	口　径　37.4 最大径　35.8 器　高　29.6	良好	外面　波状文,ハケメ, ミガキ,ナデ 内面　ハケメ,ケズリ,ナデ	外面　灰黄褐(10YR,4/2) 内面　にぶい黄橙(10YR,7/3)	
8	SE12	須恵器杯 約1/2残存 反転復元	遺構覆土	底　径　8 器　高　1.8	良好	外面　回転ナデ 内面　糸切り	外面　灰白(N,8/) 内面　灰(10Y,6/1)	
9	SE12	土師器杯	遺構覆土	器　高　2.5	良好	外面　ナデ 内面　沈線,ナデ	外面　明赤褐(5YR,5/6) 内面　赤褐(5YR,4/6)	内外面赤色塗彩
10	SD06	須恵器盤破片 約1/3残存 反転復元	遺構覆土	口　径　17.7 底　径　14.4 器　高　2.3	良好	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ	外面　灰(N,5/1) 内面　灰(N,5/1)	
11	SD06	土師器高坏 反転復元	遺構覆土	器　高　2.8	良好	外面　ナデ 内面　ナデ	外面　明赤褐(5YR,5/6) 内面　橙(5YR,7/6)	内外面赤色塗彩

写真図版

図版 1

４次調査　調査前（北西から）

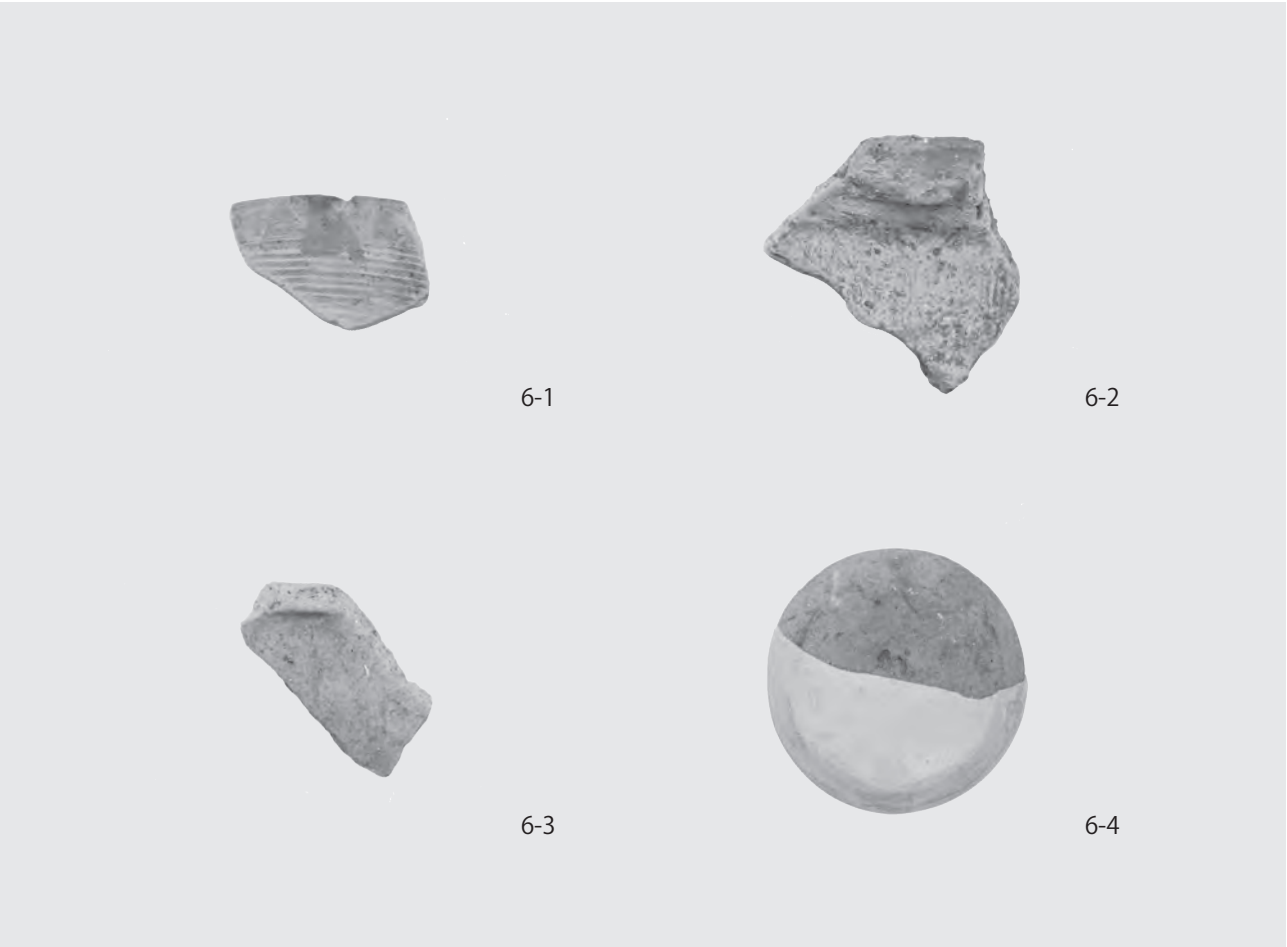
４次調査　１区完掘状況（北東から）

４次調査　２区完掘状況（北東から）

４次調査　３区完掘状況（北から）

図版 3

４次調査　４区完掘状況（北から）



４次調査　出土遺物

5 次調査　調査前（南から）

5 次調査　調査前（東から）

図版 5

5 次調査　調査前（北から）

5 次調査　遺構検出状況（北から）

5 次調査　SI01 掘り下げ状況（北から）

5 次調査　SI01 掘り下げ状況（南から）

5 次調査　SE12 掘り下げ状況（西から）

５次調査　遺構掘り下げ状況（南西から・北に正蓮寺）

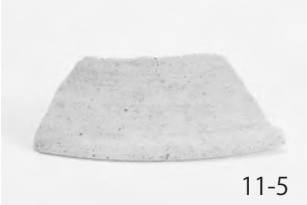
５次調査　遺構掘り下げ状況（北から）

11-1

11-2

11-3

11-4


11-5

11-6

11-8

11-9

11-10

11-11

11-7

5 次調査　出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	れいわよねんどいずもしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	令和４年度 出雲市文化財調査報告書
副　書　名	下古志遺跡(第４・５次発掘調査)
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	52
編 著 者 名	須賀照隆（編），石原聡
編 集 機 関	出雲市市民文化部文化財課
所　在　地	〒693-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL0853－21－6618
発行年月日	令和 5 年（2023）３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しもこしいせき だいよじ 下古志遺跡 第４次	しまねけん いずもし しもこしちょう 島根県 出雲市 下古志町	32203	W112	35° 20′ 36″	132° 44′ 06″	20190729 ～ 20190808	100 ㎡	集合住宅 新築工事
しもこしいせき だいごじ 下古志遺跡 第５次	しまねけん いずもし しもこしちょう 島根県 出雲市 下古志町	32203	W112	35° 20′ 29″	132° 44′ 04″	20201104 ～ 20201214	30 ㎡	グループ ホーム 新築工事

収容遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下古志遺跡 第４次	集落遺跡	弥生～中世	溝，柱穴	弥生土器，土師器	
下古志遺跡 第５次	集落遺跡	弥生～古代	竪穴住居跡， 井戸，土坑	弥生土器，土師器， 須恵器	竪穴住居跡１軒，井戸１基を確認した。

要　　約	民間開発事業に伴い下古志遺跡第４次，第５次の発掘調査を行った。 第４次では，中世以前の溝跡や柱穴を確認した。 第５次では，弥生時代終末から古墳時代前期ごろの竪穴住居跡１軒，古代の井戸１基・溝跡１基などを確認した。 下古志遺跡の北端及び西側の状況を知る手がかりを得た。

出雲市の文化財報告書　52

令和４年度出雲市文化財調査報告書

下古志遺跡（第４・５次発掘調査）

2023 年３月　印刷

編　　集　出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760
ＴＥＬ（0853）21-6618

発　　行　出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町 70
ＴＥＬ（0853）21-6874

印 刷・製 本　有限会社　西村印刷